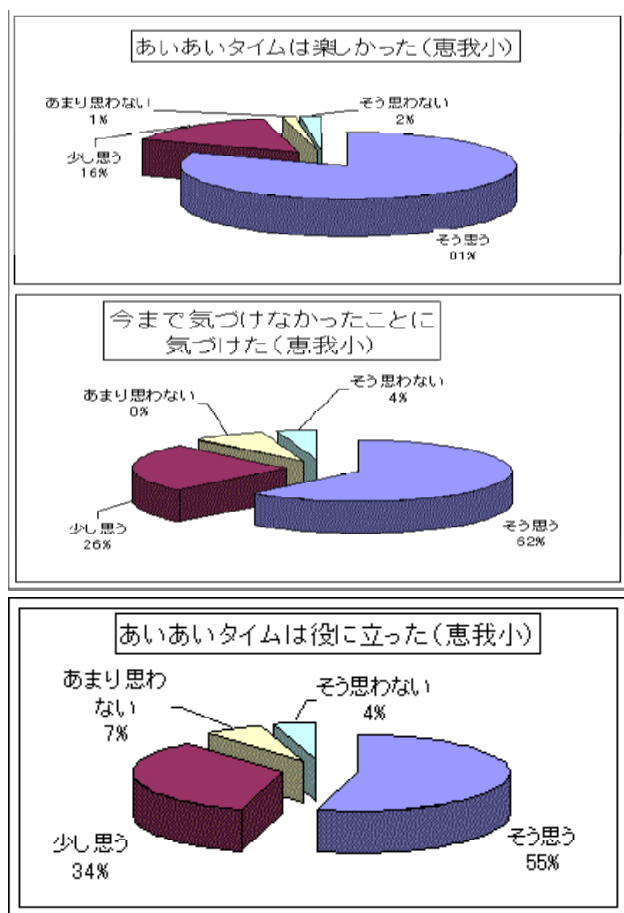


「あいあいタイム」の授業を通して、教員自身が生徒との接し方の中で、暖かいまなざしで受け入れていくこと、小さな反応にも見逃さないように注意を払うこと、そして、子どもの姿に共感をするという姿勢が浸透していく中での成果がでてきていると考えられる。

「あいあいタイム」の授業を通して

「あいあいタイム」の授業では、1時間の授業の最後に必ず「ふりかえりシート」を書かせている。どの学年も「授業が楽しかった」という質問に対しては、90%を超える子どもたちが「楽しかった」と答えている。また1学期全体をふりかえっての「あいあいタイム」の満足度を調査してみると、6年生で97%の子どもたちが楽しいと答えている。また「あいあいタイムでは今まで気づいていなかったことが気づけた」や「あいあいタイムは役に立った」という質問でも、どちらにも90%近い子どもたちがそう感じていることがわかった。高学年になると楽しさだけでなく、その有用感も感じてきていることがわかる。



低学年の子どもたちにとって「あいあいタイム」はいろいろな子と関わるきっかけになっており、また、友だちについて知る機会にもなっている。中学年の子どもたちについては友だちとのつなが

りを考えることのきっかけになっている。高学年では具体的な場面での協力を感じる機会になっている。ふりかえりの感想の中でもそのことにつながる感想がでている。その学びをシェアできるような内容にしていきたい。

a) 1年生

[1] 子どもたちの変容

学年全体では活発で元気な子どもが多く、休み時間も元気に運動場へ出て遊んでいる。中には少人数で粘土遊びやお絵描きが好きな子どももいる。学校生活に慣れ、集団生活のルールも理解して守ろうとしている。しかし、中にはルールを守りにくい子どもがいる。また、自分に自信がなく、自分の気持ちを正しく伝えることができない、感情を抑えきれない等でトラブルに繋がったりしている実態がある。

そのためには、あいあいタイムの取組等を通して気持ちの出し方や、伝え方の力をつけていきたいと考えた。1年生はどの授業も意欲的に取り組み、コミュニケーション力や対人関係も一定の効果を上げていると思うが、1学期の授業に入り込めない子どもが一部いるという課題もあるので、今後とも、あいあいタイムを楽しく、また、友だちとの好ましい関わり方のスキルトレーニングを積み上げていくことが必要と思われる。

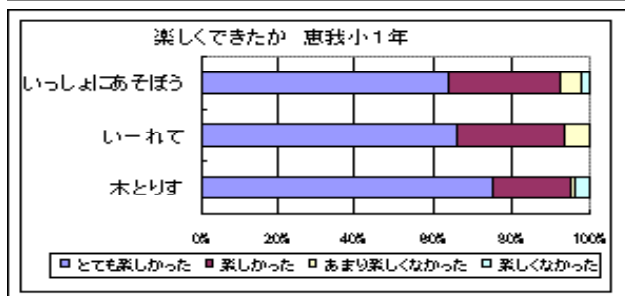
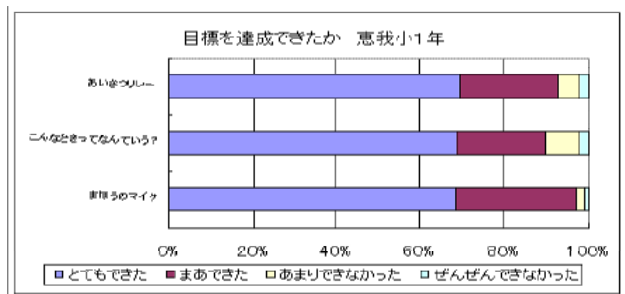
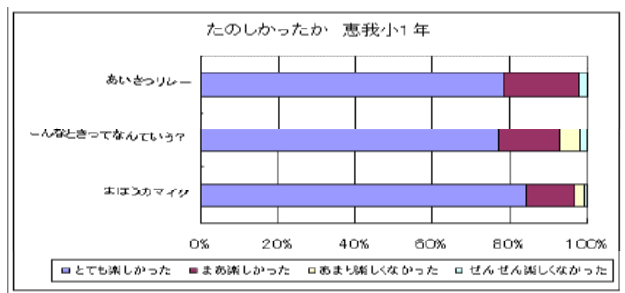
[2] 今年度の取組

1年生のあいあいタイムでは、今年度の取組として、1学期「どうぞ、よろしく」「はなそう・つたえよう」、2学期は「ききかためいじんになろう」「ともだちとなかよくなろう」、3学期は「ともだちっていいな」「ともだち大すき」ということをテーマに取組んだ。

1学期に取り組んだ「相手に伝えるように話す」というのは簡単なようで難しい。「相手をよく見て」「相手に聞こえるようにはっきりと」話すことを意識づけた。そして、自分の話したいことが相手に伝わることの気持ちよさを感じ、積極的に友だちに話しかけて関わりを持とうとする態度を養うことをねらいとした。1学期の授業「まほうのマイク」は、自己紹介リレーを成功させて、クラスで親しまれているキャラクターを助けるというストーリー性のある授業だったこともあり、キャラクターを助けたい子どもたちの強い願いは同じだという共感性を持ちやすかった。また、普段

は恥ずかしがり屋の子どももマイクを持つことで、元気に答えることができていた。ふりかえりシートの結果からもわかるように「とても楽しい」と感じている割合が高かった。今後の授業でも、1年生の子どもたちが意欲的に取り組むためには、ストーリー性のある展開や場面設定が効果的であると思う。

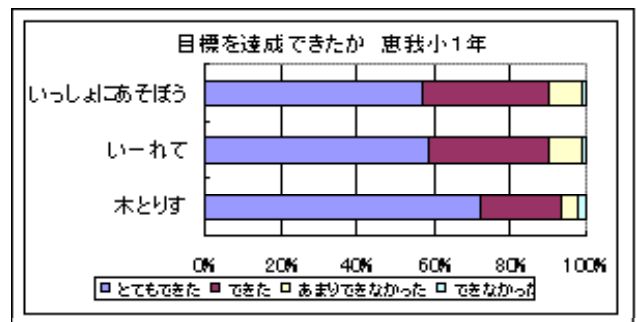
それとともに、指導者がその授業のねらいを子どもたちに意識したふりかえりをさせる必要がある。



2学期は、入学当初に比べて仲間意識が広がる中で、自分から遊びに入っていけないなど、積極的に友だちと関わりあうことが難しい子どもがいる。また、一人ぼっちでいる子に気づけなかったり、一人ぼっちでいる子に対してどのようにかわればいいのか分からない子どももいるため、「一緒に遊ぼう」「いーれて」と友だちを誘い合う授業に取り組み、積極的に友だちと関わり合おうとする態度を養わせたいと願い、「木とりす」という授業を実施した。その中から誘い合う時のルール「相手に近づく」「相手をきちんと見る」「相手に聞こえる声で話す」「笑顔で話す」などもわかってきたようだ。ふりかえりシートの結果からも、「木とりす」では、「とてもできた。」「とて

も楽しかった。」という子どもの割合が多く、意欲的に取り組んだことがわかる。

3学期は、「ともだちっていいな」「ともだち大すき」というワークに取り組むことで、クラスのみんなのいいところに気づくことができる。また、友だちに受け入れてもらうことで、自分のよさに気づくことができる自尊感情を育て、友だちとの関わりをスムーズにするコミュニケーション力を更につけていきたい。



これからも、あいあいタイムの取組を通して子どもどうしをしっかりと結びつけ、助け合えるクラスづくりを進めていきたい。

b) 2年生

[1]今年度の取組

2年生は、年間を通して「自分の気持ちを伝えられる力の育成」をめざして取り組んできた。

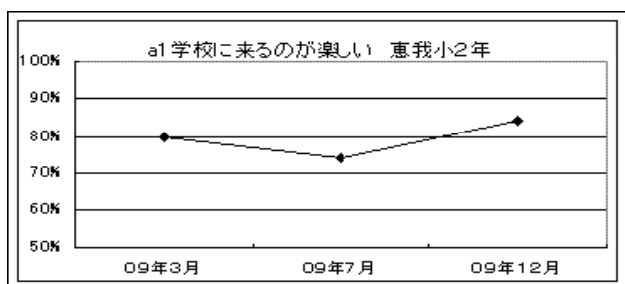
1学期は、「きき方名人になろう」というワークに、取り組んだ。1年生の時にも「きき方」をテーマにしたワークを行ったが、そこでは、相手の方を見る、やっている作業を止める、などの基本的なことを行った。今年度は、さらにそれを発展させ、「話し手を思いやる」ことに重点を置いた。まず、話し手が大切にされていると感じる聴き方のポイント(思いやりのきき方・あいうえお)を考えさせ、その上で質問をすることや相手の言ったことを受けとめて、繰り返し言うことの大切さに気づかせることをねらった。授業では、「みんなの前で話す時、ドキドキしたけど、話せてよかった。」「質問してくれて、パワーがもらえた」などの感想がでた。また日常では、日直スピーチなどで、きき手の、もっともっと知りたいという気持ちから、質問がどんどん出て、話がふくらんできた。話す側も、生き生きと話す姿が見られた。

2学期は、「ハートをキャッチ」という授業で、「今 どんな気持ち?」を導入につかった。気持ちには、うれしい気持ち、かなしいきもち、腹が立つ気持ち、さびしい気持ちなど、いろいろな気持ちが、浮かんでくる。その時の自分の気持ちをうまく相手に伝えるには、言葉が必要なこと、ま

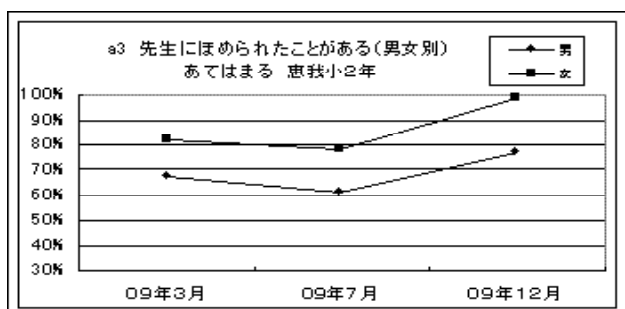
た相手を思いやって声をかけることなどをねらいにした。「うれしい、かなしい、腹が立つ、さびしい」などの表情の描かれている気持ちのカードを使った。教員のモデリングを見て、子どもたちが、感じたことを出し合い、自分たちも実際に二人組で演じてみた。このワークを通して、もめ事が起こったときなど、今どんな気持ちなのか、きちんと伝えること、またもじもじして言いたいことも言えない友だちには、優しく声をかけることが大切だと気づけた。

3学期は、子どもの実態から「ストレスマネジメント」に取り組むことにした。学校生活調査では、ストレス反応で「集中できない」という項目が男子で高くなっていた。そしてその対処法としては、「物にあたる」「人がいやがることを言う」「人をたたく」といった出し方をしていることが気になった。2年生から3年生へと成長していくこの時期に、イライラ、ドキドキの元を知り、ストレスと上手につき合う方法や、相手の気持ちを考えて行動することを身につけさせたい。そして2学期のつながりから、一步深めて自分の気持ちをしっかり伝える方法、また上手な頼み方が出来るようになればと考えている。2年生の最後には、いっしょに過ごしてきた友だちのいい所を見つけて「ほめ言葉をプレゼントしよう」に取り組む予定である。

[2]子どもの変容



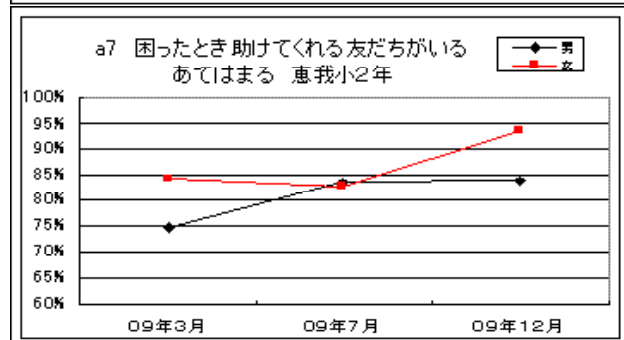
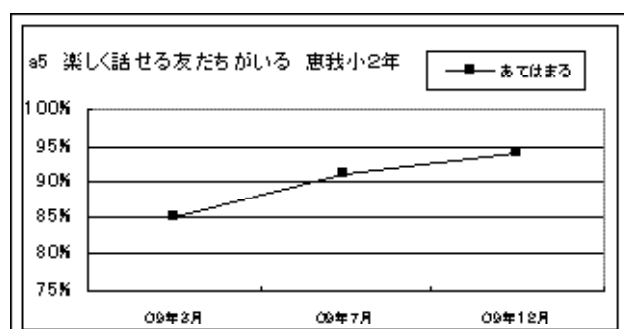
学校生活調査によると、学校生活満足度はどの項目も非常に高い割合を示している。例えば、「a1学校にくるのが楽しい」は、男女共1学期より高くなっている。クラス替えをした学年当初は、仲間関係に自信がなかった子ども、いろいろな活



動を通して、友だち関係が良好になってきたと思われる。また「a2楽しみな授業がある」「a4よくわかる授業がある」と答えている子どもも多い。

一方、教員との関係で見ると「a3先生にほめられたことがある」は、どちらも高くなっている。しかし女子が100%近いのに対して、男子は80%になっている。男子をよく注意することが、全体的な満足度に影響していると考えられる。

友だちとの関係では、「a5楽しく話せる友だちがいる」では、昨年より高くなり、仲間づくりが進んでいるものと思われる。また「a7困ったとき助けてくれる友だちがいる」という項目でも1学期より男女とも高い割合で回答している



その反面、「b2友だちとよくけんかする」が男子において昨年より増えている傾向にある。友だち関係を注意してみていく必要がある。「b9人と比べて、自分はだめなところが多い。」も男子が上昇している。周りを意識してきていると思われるが、学校生活の中で自信が持てるような場を見つけていきたい。

このような実態から、あいあいタイムとも関連しながら、友だちとの好ましい関わり方のスキルトレーニングを積み上げていくことが必要だと思われる。

c) 3年生

[1]今年度の取組

1学期の最初のパッケージでは、クラス替えの直後ということで、クラスの他の子どもたちと関わりをもつというねらいのもと、ワークを設定した。言葉を使わないで誕生日順に円になったり、

手をつないでフラフープを全員の体に通したりする授業に取り組んだ。授業が始まると、言葉をだしてしまったり、もめあいをしたりで、なかなかスムーズにできなかった。しかし、やり方を工夫してやり直す中で、次第に男女関係なく手をつないだり、声をかけあったりというような関わりが生まれていった。

4 月当初、この学年の子どもたちの実態として、特に男子の間で、日常的に友だちを傷つける言葉を言い合ってけんかになることが多かった。その度に、間に入って指導していたが、まだまだ自分本位で、自分の発する言葉が相手の気持ちを傷つけていることに気づけない子どもがたくさんいた。

そこで、1 学期の第 2 パッケージとして、言葉には友だちをうれしくさせる「ふわふわ言葉」と、傷つけてしまう「ちくちく言葉」があることに「ハートの風船」と「たわし」という具体物を使いながら理解させる授業に取り組んだ。子どもたちは、自分たちの生活を振り返り、どんな言葉が「ふわふわ言葉」「ちくちく言葉」であったかをたくさん思い返していた。この授業をしてから、日常の中で、「今のはふわふわ言葉だった。」「ちくちく言葉を言ってしまった。」というような声が子どもたちからできるようになった。あいあいタイムで学んだスキルを、日常生活に生かしていくという意味で、この授業は非常に有意義なものであったといえるだろう。

2 学期のあいあいタイムでは、子どもたちが、話をなかなか落ち着いて聴くことができないという実態から、聴くスキルについてのパッケージに取り組んだ。まず、教員が良い聴き方と悪い聴き方のモデリングを行った。子どもたちは、2 つの聴き方のちがいについて気づいたことを積極的に発表していた。そこから、「相手の目を見る」「あいづちをうつ」「最後まで聴く」という 3 つのスキルを学んだ。次の時間には、「すごろくトークン」という授業をした。このすごろくには、各コマに「好きな遊び」「好きな食べ物」などという話のテーマが書いてあり、とまったコマに書かれたテーマについて、班の友だちに話をする。子どもたちは、三つのスキルを思い出しながら、普段なかなか知ることのないお互いの話をしっかりと聴きあっていた。

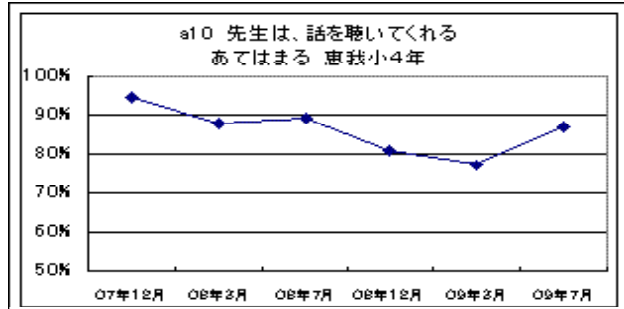
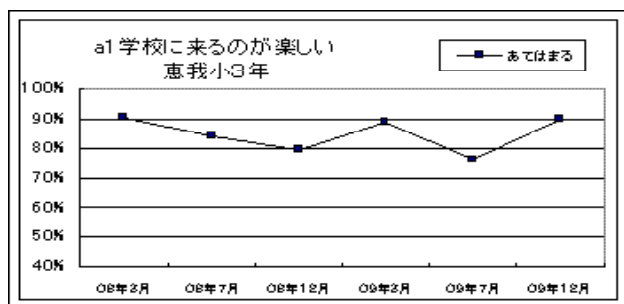
2 学期の第 2 パッケージでは、友だちと協力し合い、一つのことを達成することを目標とした「つ～ながれ!」という授業を設定した。お互いに、自然に声を掛け合い、助け合うことで、自分は友

だちと互いにつながりあい、影響を与え合っていること、互いに協力しあうことの大切さを実感させることをねらいとした。このパッケージは、ビリビリに破った新聞紙、魚に見立てた洗濯ばさみ、紙でつくったわっか、岩に見立てたイスを、それぞれの場面設定の中で、みんなで力を合わせて一つにつなげていくというものである。子どもたちは、どの授業も夢中になって取り組んだが、なかなか簡単には成功できなかった。特に、岩に見立てたイスの上ののって橋をつくっていく授業では、岩から一人でも落ちてしまったら、もう一度初めからつくりなおさなければいけないというルールを設定したため、何度やり直しても成功できないグループが出てきた。しかし、他のグループの子がアドバイスをしたり、励ましたりする中で、からだを支えあってバランスをとって小さな岩の上を歩き、クラス全員で橋を完成させた喜びは大きかった。

第 3 パッケージでは、人の心の中では、いろいろな感情がわいていることや、心がいらいりもやもやした時の対処法について取り組んだ。

3 学期は、自己肯定感と、気持ちを上手に伝える方法を考えさせる授業に取り組みたい。友だちどうしでお互いのいいところを発見しあい、自分のよさを再発見することを通して、自分に自信を持つとともに、自分の気持ちをうまく表現していくことで友達とのよりよい関係がうまれることに気づかせたい。

[2] 子どもの変容

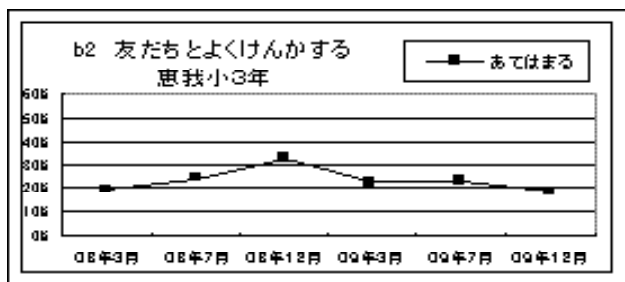
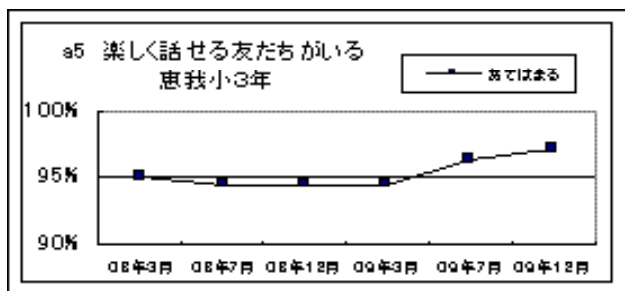


学校生活調査によると、「a1 学校に来るのが楽しい」という項目において、男子を中心にポイン

トが上昇してきている。これまで、普段の様子や学校生活調査などを通じて見えてきた子どもの実態を、学年で話し合い、それをもとにいろいろな教育活動に取り組んできたことなどが結果としてあらわれているのではと思われる。「a5 楽しく話せる友だちがいる」では、『あてはまる』が高いポイントで推移している。また、「b2 友だちとよくけんかする」では、『あてはまる』が大きく減少してきている。3年生の1、2学期を通じて友だちと協力する授業に継続的に取り組んできたことが友達関係の安定につながってきているのではと思われる。

「a1 学校に来るのが楽しい」を『全然あてはまらない』、もしくは『あてはまらない』と答えている子どもが、他のどの項目を選んでいるかを見ていくと、「a6 先生に何でも話せない」と、「b9 人と比べて自分はだめなところが多いと思う」という二つの項目が特に高い数値となった。

このような実態をふまえ、今後も子どもたちと信頼関係を築いていくとともに、あいあいタイムの授業を中心に、子どもたちに、特に「自己信頼」「コミュニケーション力」をつけさせたい。



d) 4年生

[1] 今年度の取組

1学期はお互いのことを知り、分かり合うことをねらいとして取り組んだ。楽しい雰囲気の中で、自分から声をかけることや自分の思ったことを言うことができた。

「すごろくコミュニケーション」では、普段あまり自分を表現することの少ない子どもの楽しい様子を見ることもできた。質問に次々答え、友だちの話にも笑顔で答えていた。自然とあいづち

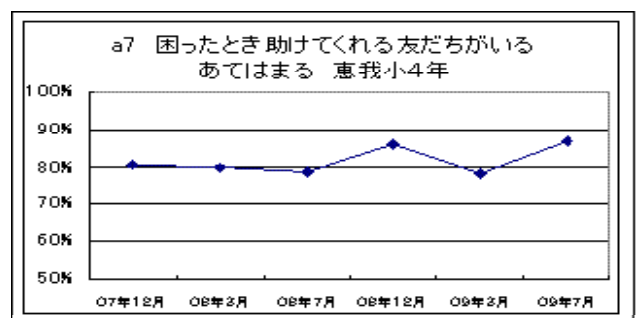
やうなずきも出ていて、楽しい時間を共有することができた。子どもたちは、恥ずかしがりながらも、友だちに話を聴いてもらえるとうれしい様子であった。友だちとの楽しい時間の中で、受け入れられるという感覚を得られると、子どもたちは進んで表現できることがわかった。

2学期は、友だちとのつながりを深めることや、ストレスマネジメントの取組を通し、相手の気持ちを考えて行動することをねらいとした。「スパイダーリフト」や「いつまで乗れるかな」など、協力して取り組む授業では、できるかできないかにこだわる子どもたちが多かったが、その中で会話や様子をふりかえられるようにした。

また、感情とはどのようなものか、感情を落ち着かせるためにはどうすればよいかなどについても考えることができた。自分と友だちの感情のちがいに生じるトラブルがあることを知り、感情や理由を伝えることの大切さを、エクササイズを通して学ぶことができた。「自分で自分の感情に対処する方法を初めて知った。」という子どもたちの感想が見られた。

3学期は、1学期と2学期に取り組んできたことを生かし、自分や友だちのことをさらに見つけ、お互いのすてきな部分を見つけられるようにしていきたい。自分の気づいていないよさを友だちに見つけてもらうこと、相手の気づいてないよさを伝えることを通し、自己肯定感を持てるようにしていきたい。また、固定されがちな人の見方も、いろいろな角度で見ることができるという気づきができるようにしていきたい。

[2] 子どもの変容

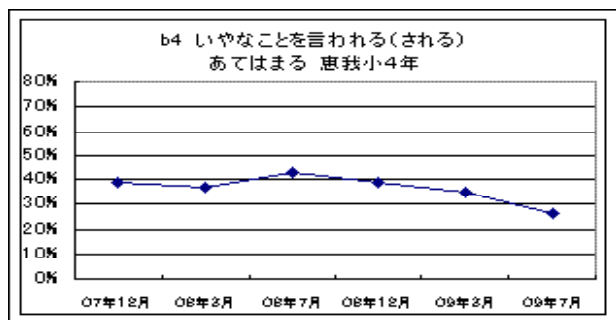


学校生活調査によると、学校生活満足度が全体的に高いパーセンテージで安定している。例えば、「a5 楽しく話せる友だちがいる」や、「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」などの項目を見ると、ほとんどの子どもがあてはまると回答している。自分だけでなく、周りの様子にも目を向けられるようになり、友だちとよい関係で過ごすことができていることがわかる。そのため、学校が

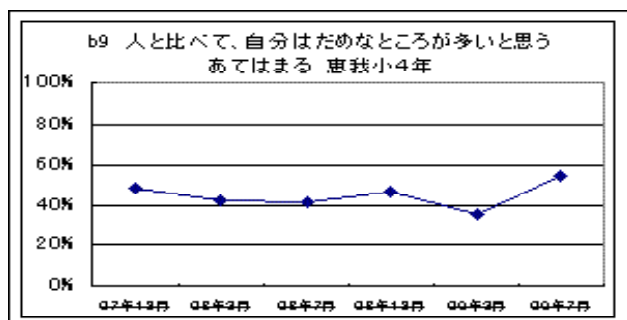
楽しく感じられていると考える。

一方、「a5先生に何でも話せる」や、「a8先生に困ったことを話せる」という項目では、あてはまると答えているのは全体の約半数となっている。「a10先生は、話を聴いてくれる」では、あてはまると答えている子どもが多いことから、教員との関係が悪くなったというよりも、困ったことや自分のことなど様々な話は、友だちに話す傾向がでてきているからだと考えられる。

悩み度のアンケートを見ると、子どもたちの悩みは少なくなっていることがわかる。ほとんどの項目で、あてはまるという回答が低い数値で表れている。特に、前回のアンケートと比べ、「b4いやなことを言われる(される)」や「b5仲間はずれにされる」などの項目では大きく好転し、男女ともあてはまるという回答が20%を切っている。



先に述べたように、友だちとの関係もよくなっており、友だちに相談したり、話し合いができていたりしているため、悩みも減ってきていると考えられる。しかし、悩み度のポイントが依然として高い項目もある。「b9人と比べて、自分はだめなところが多いと思う」では、男女とも約半数があて



はまると回答している。今まで自分しか見えていなかった子どもたちが、高学年に入り、周りを意識し始めたことも関係していると考えられる。良い意味でも、周りのことを考えられるようになったということである。しかし、その中でも、周囲の人よりも苦手とすることに目が向き、自信を持っていないようになっているのだろう。

友だちとの関係は、前記のa7のグラフを見てもよくなっていることがわかるので、友だちと

のよい関係を、自己肯定感へとつなげられるようにしたい。

e) 5年生

[1]今年度の取組

1学期は学級開きを意識したパッケージから始めた。自己紹介をゲームにした内容で、まずは新しい仲間を知り、新しい学級に打ち解けていくことをねらいとした。簡単なルールでのエクササイズだったので、楽しく取り組むことができていた。困っている子に声をかけたり、合図を送って教えたりする姿が見られた。

学級に慣れてくると、友だちの嫌がることも言うようになってくる。自分勝手をするのではなく、自分を大切に思いながら他者も大切にできるようになることをねらって、次のパッケージを設定した。「わたし発見! 友だち発見!」では、それぞれ意見を出し合い、ちがいを受け入れあうエクササイズから始めた。実に様々な意見が出て、楽しみながら発表する姿があった。その後の、自分の長所を友だちに見つけてもらうエクササイズでは、自分では気づいていなかった長所にをつけてもらって、とても喜ぶ様子が見られた。教員による仲間関係のロールプレイでは、しっかり見て、登場人物の気持ちを考えることができていた。

また、林間学舎と関連づけたパッケージを実施して林間への動機づけにした。子どもたちが自分の役割を探しながら、力を合わせて何かを完成させられるようなエクササイズを行った。

2学期の取組は、あたたかい言葉がけのパッケージから始まった。子どもたちが普段使う「ちくちく言葉」や「ふわふわ言葉」を最初に扱った。声に出して読んでみてどんな気持ちになったかを子どもたちは発表した。また、喜んだり困ったりしている友だちに対してどんな態度でどんな言葉をかけるか、ロールプレイを重ねて練習した。

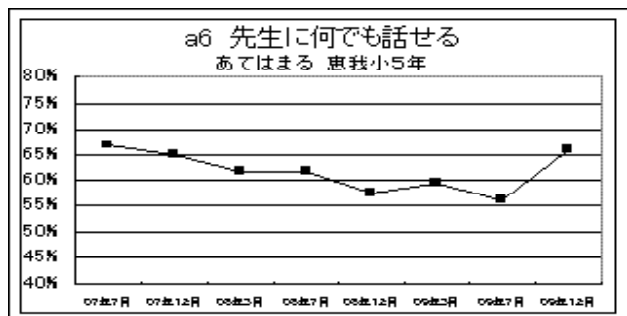
2学期半ばになると、友だちとの衝突が増えてくる。ここで問題解決に取り組むパッケージを取り入れた。友だちと衝突したときにけんかで解決するのではなく、気持ちを考えたり、問題点を整理したりするきっかけにすることをねらいとした。毎回、「問題どこナンジャー」からの問題を解くという形式で場づくりにこだわって実施してきた。アイデアを出し合いながら解決しようとする姿勢が多く見られた。

3学期は、もう一度友だちと一緒に力を合わせて課題を解決する活動を行う。その中で、友だちと喜びを分かち合う体験をさせたい。そして卒業

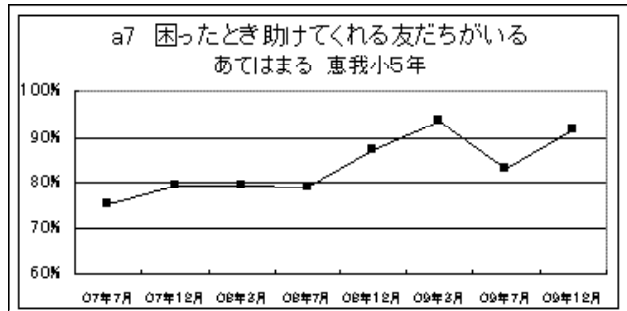
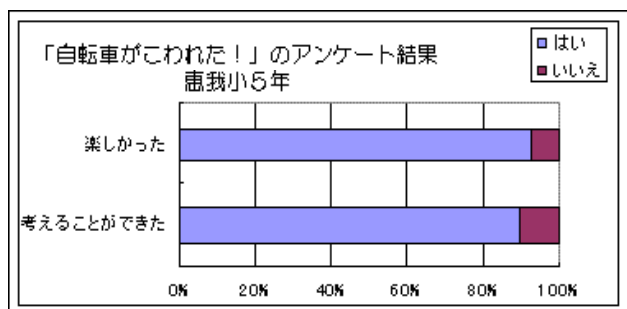
式には、子どもたちが在校生代表として送り出す立場を意識して臨むようにしていきたい。

[2]子どもの変容

2学期末の学校生活調査の結果によると、「a6 先生に何でも話せる」「a10 先生は、話を聞いてくれる」などの項目において「あてはまる」と回



答する割合が増加してきている。もめごとが起こったときには時間をとって話を聴き、その都度対応してきたことなどで、教員との関係が安定してきたのではないかと考えられる。

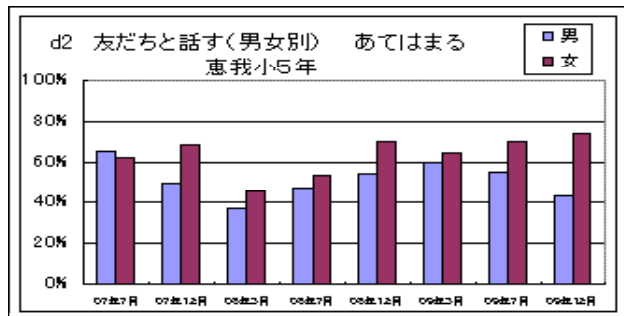


また、「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」の割合は、1学期末には減少していたが2学期になって大きく増加している。学級では仲の良い子同士のグループが2学期末でさらに形成されてきた。子どもたち全員が、助けてくれる友だちがいると感じられるように、ひき続き仲間づくりに取り組んでいきたい。

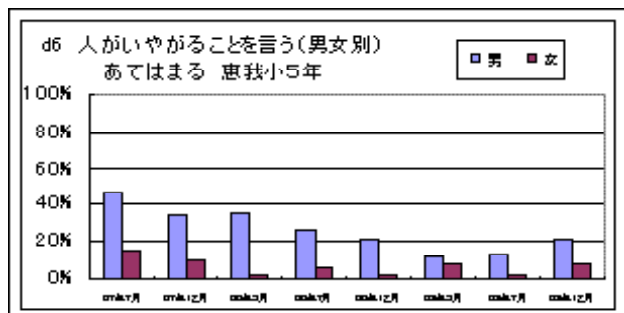
さらに、悩みについての「b7 家がおもしろくない」「b8 ほっとできる場所がない」の項目に「あてはまる」と回答した割合が全体的に減少していた。家庭に対する意識の変化があったように思われる。

一方で、友だちや家庭に関連して、男女差が顕

著に表れ始めた項目もある。ストレス対処としてのコーピングについての、「d2 友だちと話す」「d3 家族に話す」の数値が、1学期末よりも男子は減少し、女子は増加している。男子は友だちと仲良く過ごしているが、友だちや家族に話をしてストレスを解消させるような関わり方をしなくなってきているのではないかと考えられる。



コーピングの手段として「d6 人がいやがることを言う」といった攻撃的対処を選ぶ割合は今回やや増加したが、長期間の調査結果を見ると、概ね減少傾向にあるといえるのではないだろうか。「d7 人をたたく」対処についても2学期末はほぼ同じ割合を示していた。



子どもの仲間関係は徐々に深まり、教員や家庭との関係も安定してきているように見うけられる。一方で、他者との衝突が起こったとき、一旦冷静になって止めることができずけんかがエスカレートしてしまうことがあった。統計では減少傾向にあるとしても、実態としてこのような事例が起こっている。またそれに加えて、2学期には女子の間のもめごとが増えた。思春期に入るにつれて、さらに増える可能性もある。

子どもたちには依然として自己中心的なところがある。気持ちを伝え合うことの大切さを伝えるために、協力によって喜びを感じたり、友だちの気持ちを想像したりする取組をこれからも重ねていきたい。

f) 6年の取組

[1]今年度の取組

6年生は、昨年度から「絆」ということをテーマにあいあいタイムの授業や様々な取組を通して、

仲間とのつながりを常に意識した実践を行ってきた。

今年度は、さらに仲間との関係を深め、「気持ち」でつながり合える仲間関係を築いていくために、様々なパッケージを設定した。思春期に入り、自分の本音を出すことが難しくなっていて、グループ化が進み、学級や学年としてまとまりに欠く場合も見受けられる。

しかし、一方で、以前よりも増して、仲間に関することをわかってほしい、もっとつながりたいという思いが強くなってきている面もある。パッケージを通して、友だちの良さを知り、仲間どうし共感できるような関係を作っていくことを目標とした。

1学期は、実際に体を支え合ったり、触れ合ったりする授業を多く取り入れ、その中で、相談し、協力して、課題を解決していった。子どもたちの実態に合った授業であった。ふりかえりでは、「ゆずり合うことも大切であること」や「本当に支えあえる友だちをもっとつくりたい」などという感想があった。

2学期には、深まりつつある友だちとの「絆」をより確かなものとするために、周りの人の気持ちを考えさせるようなエクササイズを取り入れた。

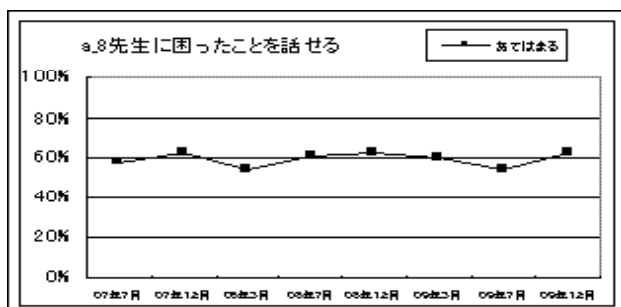
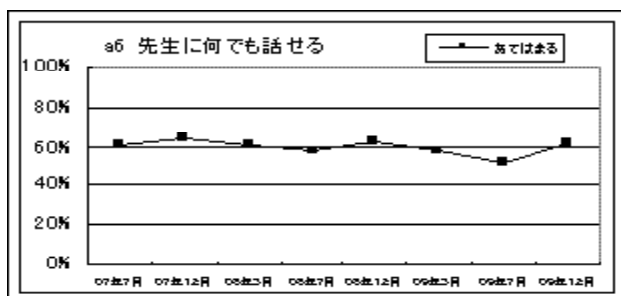
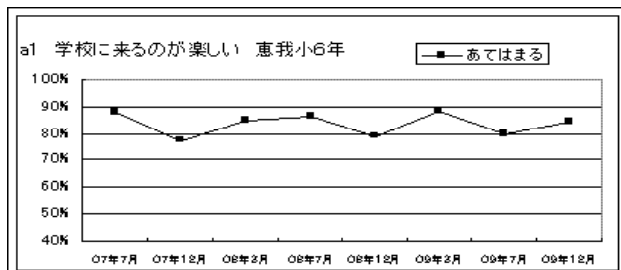
運動会の組立て体操と結びつけて取り組んだ授業では、より相手の立場になって気持ちを考えることができ、その後の組立て体操の練習におおいに役立った。そして、友だちとの普段の会話でも相手の気持ちを考える声かけができるようになった。また、七中1年生ととともに取り組んだ「そうそう それぞれ」では、小学生がポスターを見て、その内容を中学生に伝え、その聞いたことにもとづいて中学生がポスターを作成するという「伝言コピーゲーム」を行った。ポスターの内容を正確に伝えるという責任の重さにとまどいながらも、中学生のあたたかい言葉がけやグループの人からの励まし、賞賛等により、楽しく取り組んでいた。改めて、中学生の優しさやお互いの言葉のかけ方の大切さを実感していた。

<ふりかえりカードより>

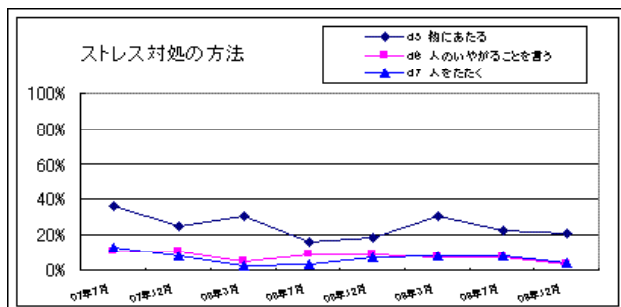
- ・小学生のペースに合わせて聴いてくれた。楽しくできた。中学生が進めてくれた。
- ・中学生の人たちは、ぼくたちのためにいっしょうけんめいがんばってくれて、いいなあと思った。
- ・年令がちがっても「協力」することは大切だと思いました。やさしく聞いてくれて、言いやすかった。

3学期は、今まで築き上げた自分のことや周りのことを再確認させ、中学へ向けて自信をもって卒業できるようなエクササイズに取り組ませたい。

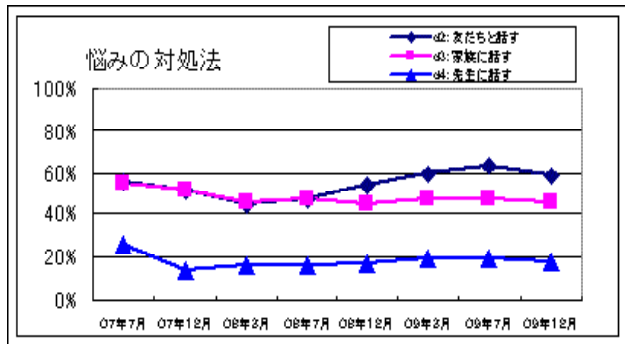
[2]子どもたちの変容



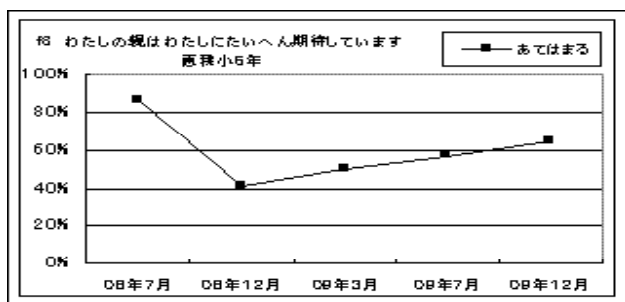
さて、6年生の子どもは、思春期に入り、5年生の3学期にストレスが増えてきた。そのことをうけ、「ストレス対処」についての実践を行った。その結果、子どものストレス度が減少した項目が多かった。「ストレス」というものの存在を知り、その対処法について学ぶことは、子どものストレスを軽減するのに有効であったと言える。また、ストレスの対処法として、「物にあたる」「人のいやがることを言う」「人をたたく」をあてはまるとしている子どもの割合が減少傾向にある。ストレスを学ぶことによって、負の対処法をとる子



どもが減ってきたことはよかったと思われる。
 悩みがあったときにどうするかという質問では、
 「d3 家族に話す」や「d4 先生に話す」に比べて、
 「d2 友だちに話す」という項目がかなり増加し
 ていることがわかる。このことから、6 年時(特
 に、2 学期)に友だちとの関係をうまく結べるよ
 うな授業を取り入れていくことが重要であると考
 えられる。



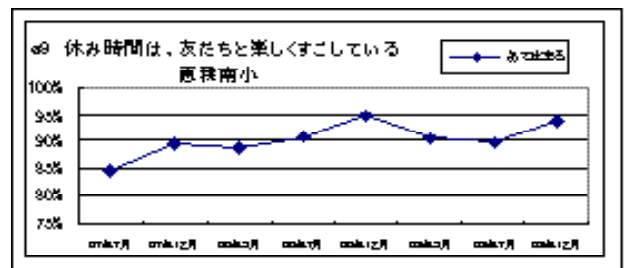
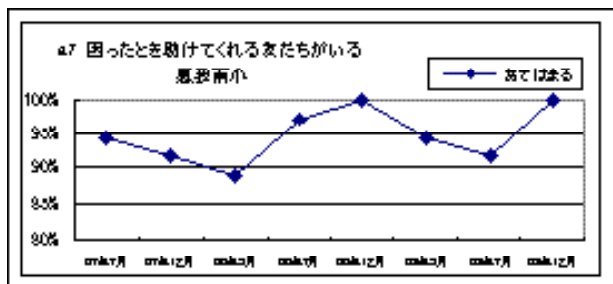
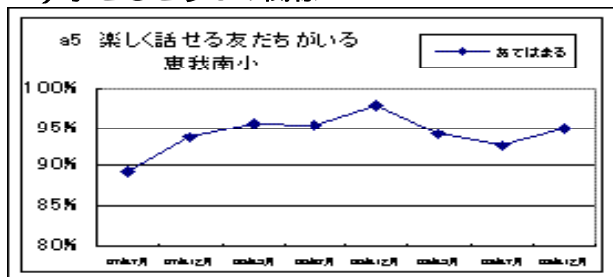
さらに、「f6 わたしの親は、わたしにたいへん期待しています」という項目の増加が顕著であることを受け、親子関係にも着目しながら、取組を進めていきたいと考える。



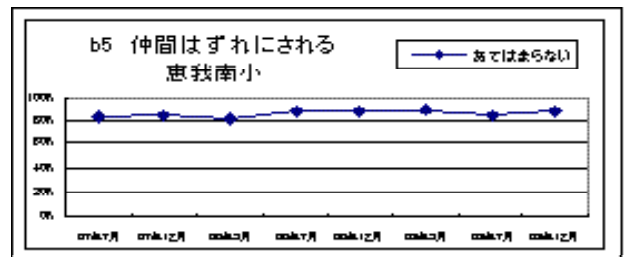
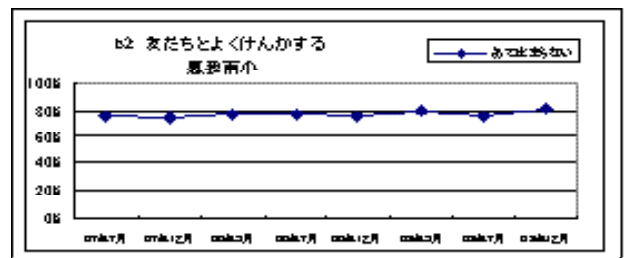
4) 恵我南小学校

学校生活調査から

a) 子どもどうしの関係

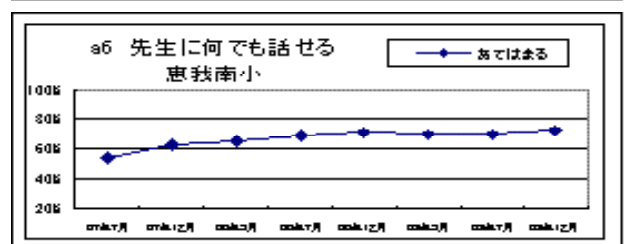
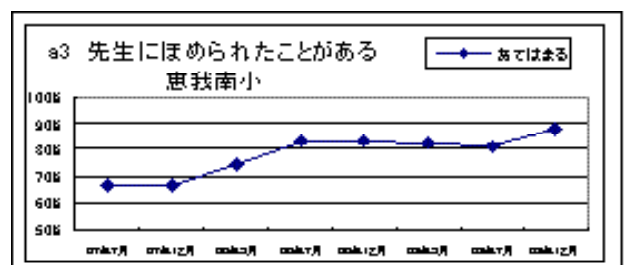


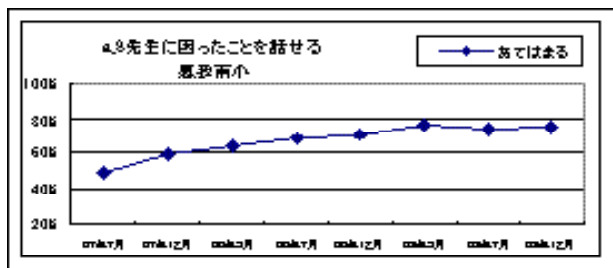
「a5 楽しく話せる友だちがいる」「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」「a9 休み時間は友だちと楽しくすごしている」など、子ども同士の肯定的な関係を示す項目は、いずれも高い率を維持している。友だちと楽しい学校生活を送っていることがうかがわれる。一方、子どもどうしの否定



的な関係を示す項目をみると、「b2 友だちとよくけんかする」「b5 仲間はずれにされる」では、ともに「あてはまらない」が高い率にある。日常生活の中で、小さなもめごとはあるものの、そのことが長引いたり、いじめのようなことにつながったりはしていないことがわかる。

b) 教員と子どもの関係

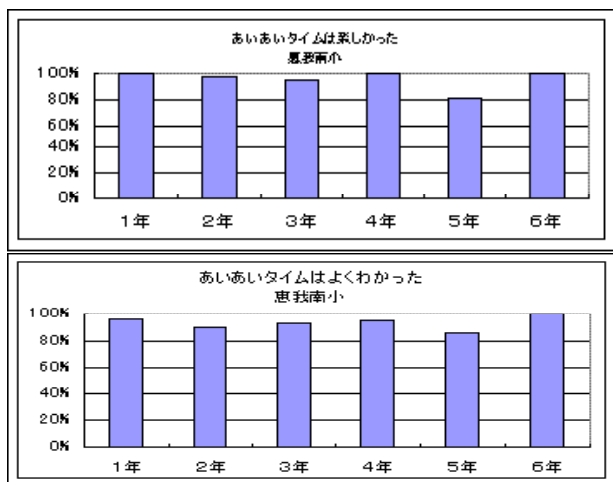




「a3先生にほめられたことがある」と答えた子どもは増加の傾向にあり、90%に達しようとしている。「あいあいタイム」では、みんなの前で自分の意見を発表できる場面、自分を認めてもらえる場面が多く、教員にほめられる機会も多いためだと考えられる。「a6先生に何でも話せる」「a8先生に困ったことを話せる」の項目も増加傾向で、教員と子どもとの関係がより良好になってきている表れであると考えられる。

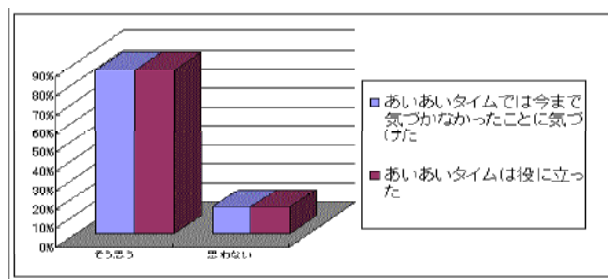
「あいあいタイム」の授業を通して

下のグラフは、2学期末に行った「あいあいタイム」の授業についてのアンケート結果で、「あいあいタイムは楽しかった」、「あいあいタイムはよくわかった」、の項目に対して、「そう思う」「少しそう思う」と答えた子どもの割合である。どの学年も高い数値を示している。特に「あいあいタイムは楽しかった」の項目では、1年生、4年生、6年生の100%の子どもが楽しいと感じている。



「あいあいタイムでは今までに気づけなかったことに気づけた」、「あいあいタイムは役に立った」という項目に対して「そう思う」「少しそう思う」と答えた子どもの学校全体の割合を見ると、どちらも86%に達している。

このように、子どもたちは「あいあいタイム」を毎回楽しみにしており、有意義に感じている子どもも多く、意欲的に取り組んでいることが分かる。



a) 1年生

[1]今年度の取組

学年初めは学校生活を楽しみに入学してきた1年生が「学校が楽しいな」「こんなお兄ちゃん、お姉ちゃんになりたいな」と思える「あいあいタイム」を毎年取り組んでいる。

・2年生と一緒に

2年生から、「あいあいタイム」の始まりの歌「ぴったんこ」を譲り受けた。年が1才しかかわらない2年生が、1年生をリードして歌や踊りを教えてくれることで、初めて取り組む「あいあいタイム」が楽しみになった。

・6年生と一緒に

6年生との「あいあいタイム」では、「ぴったんこ」の踊りを一緒にし、楽しく過ごすことができた。すっかり打ち解けたことで、その後の毎木曜日の20分休みに一緒に遊ぶ取組を心待ちにしている。

1学期「あいあいタイム～みんななかよし～」

音楽や体育での音遊びや動物のまねっこ遊びの取り組みを、ルールを守って、協力してできるエクササイズに活用した。教室の中にいる配慮を要する子どもたちも楽しめるよう工夫して、みんなといると楽しいという思いを共有させた。

第1時：ルールをまもってなかよく

第2時：まねっこ まねっこ

第3時：まねっこ まねっこ かがみだよ

2学期「あいあいタイム

～ともだちと なかよくなる～」

入学当初に比べて仲間関係が広がるなかで、自分から遊びに入っていけないなど、積極的に友だちと関わりあうことが難しい子どもがいることが、わかってきた。また、一人ぼっちでいる子に気づけなかったり、一人ぼっちでいる子に対してどのように関わればいいのかわからない子もいる。

そこで、2学期は「一緒に遊ぼう」「いれて」と友だちを誘い合う授業に取り組み、積極的に友だちと関わり合おうとする態度を養うことにし

た。

第1時：いっしょにあそぼう

第2時：いーれて

第3時：木とリス

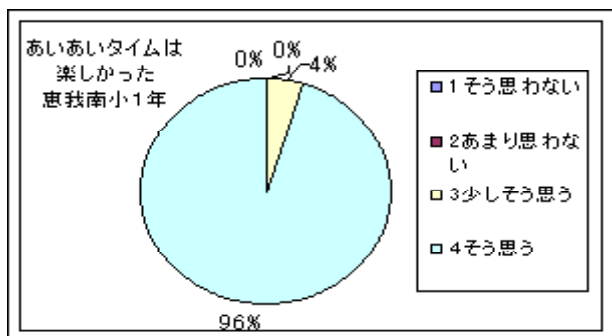
3学期の予定

2学期の「あいあいタイム」により、誘い合っ
て一緒に遊べるようになってきた。3学期は、一
緒に遊ぶことも増えるが、子どもたちの遊びの中
でケンカになったり、もめ事が起こるようになると
思われる。その問題の都度、子どもたちが問題を
を共有し、話し合い、解決できるように組み
たい。

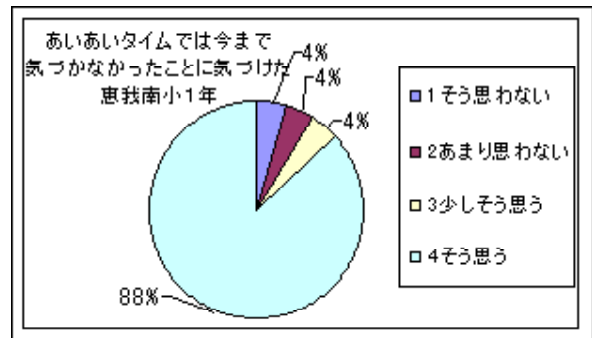
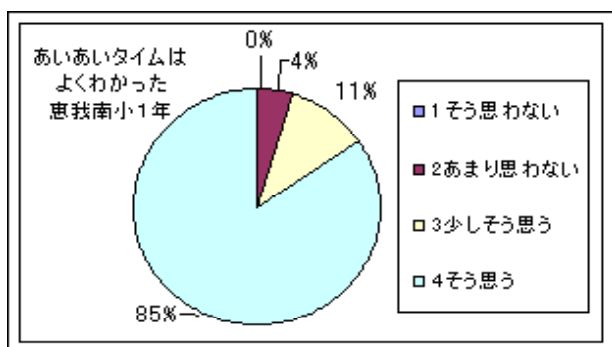
そのためにも、子ども一人ひとりの発言を大切
にできる場を大切に、学級の中で自分の居場所
があると安心できるような「あいあいタイム」を
考え実践していきたい。

[2]子どもたちの変容

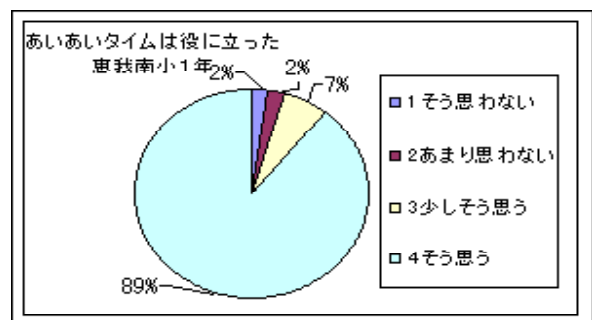
「あいあいタイム」は、学校生活の中で子ども
たちが待ちわびる時間になっている。2学期最後
にとったアンケートでは、ほぼ全員が楽しいと答
えた。



また、内容も子どもの実態に合わせて、1学期
は心ほぐしも兼ねて、みんなでゲームを楽しみな
がら、仲良くなれる内容を考えた。2学期は、1
学期を踏まえて、友だちを増やして、もっと仲良
くなれるようにスキル学習に取り組んだ。このよ
うに子どもの実態に合わせた内容に取り組んだこ
ともあり、96%の子どもが、「あいあいタイム」
はよくわかったと答えた。



スキル学習に取り組んだことで、友だちを誘っ
たり誘われたりすると、気持ちがいい、楽しいこ
とに気づけた子どもも多く、「あいあいタイム」
は、役に立ったと答えた子どもも90%を超えて
いる。



b) 2年生

[1]今年度の取組

2年生になり、小学校で初めてのクラス替えを
経験した子どもたち。当初、1年生で同じクラス
だった友だちとばかりかたまって、なかなか友だ
ち関係を広げられずにいる様子うかがえた。

そこで、1学期は、たくさんの友だちと関われ
るパッケージを実践することにした。1つ目は、
「2年生でもよろしくね」というパッケージを取
り組んだ。「いろいろあく手」というワークでは、
音楽に合わせて、両手で、片手で、指先でなど、
いろいろな握手を、なるべくたくさんの友だちと
するようにした。また、その時にあく手に合わせ
て、自分の名前や、「よろしくね」などの一言を
そえるようにした。実際に友だちの手にふれたり、
声を聞くことによって、友だちの存在を感じるこ
とができたようである。感想にも、「ともだちの
手をさわってみたら、あたたかかったです」「い
ろいろな人とあくしゅをして、気持ちがすっきり
しました」と書いている。このあと、自己紹介の
エクササイズをおこない、一人ずつ、好きな食べ
物や、得意なことなどを発表した。「じぶんのこ
とをみんなに知ってもらってうれしい」「みんな
がいろいろなことにきょうみをもっているとおも

った」といったように、自分のことを知ってもらいたい、友だちのことをもっと知りたい、という感想がたくさん見られた。

2つ目は、「きょう力するってすばらしい」というパッケージで、「バースデーチェーン」「ピンポン玉をまわそう」「ボールをキャッチ」という授業に取り組んだ。友だちと協力して一つのことをやりとげる、という体験が少ないのではないかという、教員の思いから行った授業である。この授業では、友だちと協力して、一つのことに取り組み、成功したときの喜びや、達成感を感じることができた。そして、その喜びを一緒に共有できる友だちがいることの心地よさを感じ取ってくれたようである。また、失敗した子を責めるのではなく、「ドンマイ」「次がんばろう」などの声かけも聞かれた。「ルールをやぶらないで、ふざけずにできてよかった」「みんなできょう力したらぜったいできると心の中で思いながらやったらできた」というような感想があった。

2学期は、自分の気持ちを素直に伝えることができなくて、もめごとになってしまう、という実態から、「ハートキャッチボール」というパッケージを実践した。まずは、「気もちいろいろ」というワークで、人にはいろいろな気持ちがあること、人によって、伝えやすい気持ちは違う、ということを勉強した。また、気持ちは目に見えないものなので、このパッケージでは、気持ちをハートのクッションで表し、視覚的にも分かりやすくするよう工夫した。次に、「はらが立つ気もちをつたえよう」「さみしい気もちをつたえよう」というワークでは、ハートのクッションを使ったモデリングを見せながら、どのように伝えることが大切かを考えさせた。ここでは、はっきりと、

ことばで、あいてをきずつけないの3つを提示し、暴力や悪口で伝えたり、黙って心の中に抱え込むのではなく、素直に伝えることの大切さを学習した。エクササイズとして、友だちと練習するときもこの3つを常に意識させ、互いに評価もした。最後は、このパッケージで学んだことを元に、友だちが伝えてくれた気持ちを、あたたかい言葉で返す「気もちをキャッチ」というワークに取り組んだ。せっかく出してくれた気持ちを、心ない言葉や暴力で返すのではなく、しっかり受けとめて、返していく、ということ、これもモデリングを見ながら勉強した。子どもたちからも、「はらが立っても、あいてにちゃんと言ええいとわかりました」「これから、さみしいことがあれば、きょうならったやりかたでつたえようと思

いました」「ことばでつたえたらけんかにならないと分かりました」といった感想が見られ、ことばでつたえることの大切さが実感できたようである。

しかし、実際の場面では、まだまだささいなことですぐに腹を立ててしまったり、友だちの悪いところばかりに目がいてしまうことも多い。よって、3学期は、ストレスマネジメントや、友だちのいいところさがしなどのパッケージに取り組み、よりよい人間関係をつくっていけるようにしていきたいと思う。

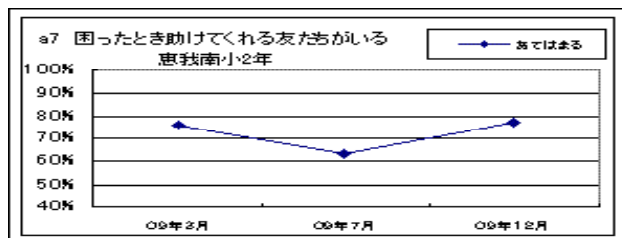
[2]子どもたちの変容

全体的に2年生としての自覚が芽生え、学校生活の規律が少しずつ身についてきた。

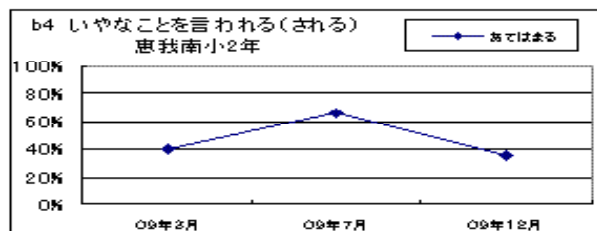
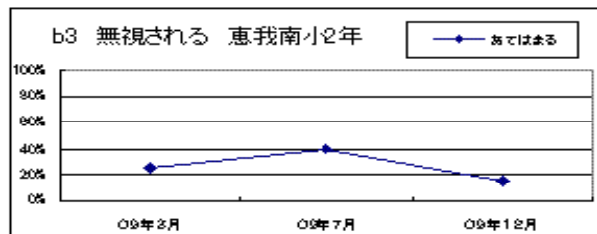
学校生活調査によると、学校生活満足度が、増えている。



中でも、「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」が、20%近く増えている。



また、「b3 無視される」「b4 いやなことを言われる(される)」が、軒並み減っている。



これらは、「あいあいタイム」で、友だちと協

力することや、気持ちの伝え方を学習した成果だと考える。しかし、「b5 仲間はずれにされる」の女子は、下がっていない。まだ特定の友だちとしか、遊べない女子がいるためだと思われる。

3学期は、この点を改善できるようなパッケージに取り組んでいきたい。

c) 3年生

[1]今年度の取組

1学期は、新しいクラスの友だちと仲良くなれるような授業「みんなよろしく」から始めた。名前や顔は知っているが、話しかけたことがない子が何人もいるような状態だった。そこで、「みんなでキャッチネーム」「パースデーチェーン」や「後ろ姿はだれでしょう」など、子どもたちが、お互いに自信を持って名前を呼び合えたり話しかけたりして打ち解けるようなゲーム的なものにした。「ともだちの名前をぜんいんおぼえられたと思います。大きな声で友だちの名前を言えてうれしかったです。」「みんなでキャッチネーム」をして、いままで名前をよぶのが少しはずかしかった時もあったなあと思いました。・・・ともだちがふえると思います。楽しみです。」と、感想から四月当初の子どもの微妙な気持ちがうかがえる。

「みんなよろしくパート」では、「親友になる聞き方」「サイコロトーク」のエクササイズに取り組んだ。この授業では、「みんなのことがよくわかったから、もっと知りたいので、またやりたいな。」「友だちに聞いてもらってあいづちをうってくれてちょっと気持ちが楽になった。・・・こんなことが友だちにあったんだと思った。」など、子どもたちは、より親密になるための方法を理解した。さらに、「めざせ言葉かけ名人」のワークでは、自分から積極的に友だちに関わる時、どのようにすればよいかを「ごめんね」「ありがとう」の具体的な場面での言葉のかけ方について学習した。「ありがとう」の気持ちを込めて言う時、お礼の気持ちを言う人と言われる人の気持ちを考えさせた。子どもたちは、一つの言葉を添えることでお互いにうれしい気持ちになることに気づくことができた。

1学期の最後に、「友だちのいいところしょうかい」「いいところ見つけ」をして、これからも仲間として頑張っていこうと締めくくった。

2学期は、子どもたちは、運動会や遠足の行事で仲間と共に過ごす楽しさを感じた。それに乗じ

て、仲間と協力して気持ちを一つにすればできる達成感を感じてほしいと考え、「新聞紙でつ～ながれ」「魚で一つにつ～ながれ」「わっかで一つにつ～ながれ」「橋を作ってつ～ながれ」一連の「つ～ながれ」の授業に取り組んだ。「みんなできょう力できてうれしかったです。ちゃんがおちそうな時、ちゃんがささえあげたから、おちないでよかったです。はじめはできないと思ったけど、みんなで力を合わせたらできました。きょう力は、大切なんだなあと思いました。これからもきょう力していきたいと思います。」

子どもたちは、積極的に関わり合い支え合う態度を養い、協力すれば一つの物事を成し遂げられる喜びを感じていた。

2学期終盤は、子どもたちが互いの気持ちを分かり合い、気持ちよくつきあっていくことが出来るように、「気持ちを分かり合おう」に取り組んだ。これまでの授業とちがって体を動かすことは少なかったが、自分の気持ちをちゃんと伝えることの大切さや、友だちのちょっとした行動・仕草や言葉から相手の気持ちを分かってあげることの大切さを理解したのではないだろうか。

3学期は感情のコントロールとして、気持ちの素直な表し方や、イライラの解決方法についての授業に取り組みたい。

[2]子どもたちの変容



「a9 休み時間は友だちと楽しく過ごしている」や、「a10 先生は話を聞いてくれる」は共に高い率を示しているなど、学校生活を楽しく感じている子どもが多い。

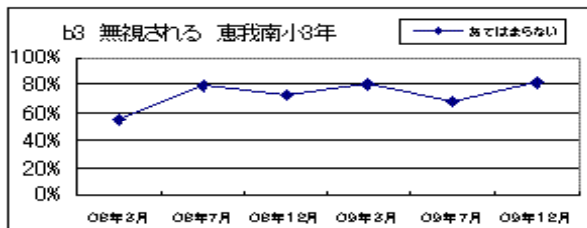


しかし、「b1 勉強がわからない」は男女共に率を上げており、算数をはじめとして学習内容が難しくなったことの表れと思われる。

「b2 友だちとよくけんかする」「b3 無視される」「b4 いやなことを言われる(される)」「b5 仲間はずれにされる」は共に好転している。

「つ～ながれ」の授業の効果の表れと思われる。

「c10 イライラする」は上昇傾向にあるもののその解消方法として人のいやがることを言ったり(d6)、人をたたく(d7)などの攻撃的な方法はとらずに、友達と遊んだり(d11)、話したり(d2)して解消しているようだ。



3年生も半ばを過ぎて、精神的にも低学年から中学年らしくなってきた感じがする。まだまだ幼さを残しながらも、自分なりの価値観が出てき始めたようだ。

d) 4年生

[1]今年度の取組

4年生は、4月の学年学級開きから始まり、学年行事である林間学校、運動会の団体演技、そして総合的な学習の時間と、友だちと関わりながら取り組むことが多い。そこで、目標として「みんなで協力」を掲げながら活動してきた。

「あいあいタイム」でも「友だちとのつながりを深めよう」を根底において、いろいろなパッケージに取り組んでいる。

1学期は、新しい友だちにも気軽に声をかけられること、友だちの頑張りに気づくことをねらいとした「学年学級開きあいあい」に取り組んだ。学年集会の形態を使って行ったワーク「背くらべあいあい」や「パースデーチェーン」では、自然な形でリーダーになる子が声かけをし、目標を達成することができた。

「さんPR大作戦」では、仲間の良いところ

を探し合い、発表し共有することで友だち関係を広げた。

6月、7月には、初めての宿泊行事である吉野山林間学舎を成功させようという気持ちを育てるため「班のつながりを深めるぞ」「林間あいあい-友だちとつながろう」に取り組んだ。その中で、班で協力して一つの課題を解決し、達成感を味わった。また、仲間との信頼関係を築いて、自己信頼・他己信頼を深めることができた。

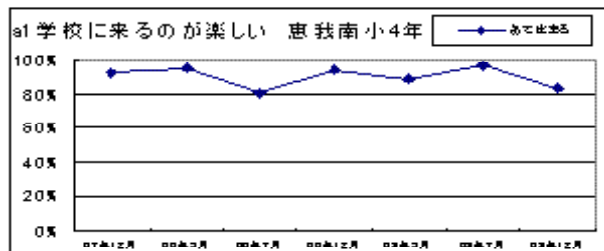
班で協力して一枚の絵を完成させる授業「班対抗お絵かきリレー」では、一生懸命自分が見てきた情報を班のみんなに伝えようとした。中間シェアリングでとった作戦タイムでは、効率よく課題を仕上げるためそれぞれが工夫を凝らしていた。絵を完成させた後、みんなで楽しみながら虹を描いた。

2学期は、運動会で初めて経験する団体演技としての「旗体操」を、気持ちを一つにしてがんばって取り組んだ。しかし、友だちとの関わりが増えることで、いろいろな意見のちがいや、自己主張が強すぎて言い合いになったりすることでもできた。また、遊びの中でもささいなことから感情の行きちがいが起こりけんかや、無視されたと感じる場面も起こった。そこでいろいろな場面で起こりうる「気持ち」を「感情」という言葉にレベルアップさせ、「感情を伝え合ってわきI相(あいあい)」というパッケージに取り組んだ。

「感情って何？」の授業では、感情100マスからいろいろな感情語を見つけ出した。「感情って複雑！」では、人や立場によって感情がちがう場合があることを、自分の生活と重ね合わせながら考えた。「落ち着け感情！」では、抑えきれないほどの強い感情をコントロールする方法を、モデリングを見ながら考え、ロールプレイで練習した。深呼吸などの方法は今までも実践している子どもたちもいた。その他の方法としては気分を転換したり、その場から離れるという方法も自分たちの経験から考え出していた。「伝え合おう！この感情！」では、よい人間関係をつくるために、お互いの感情を言葉で伝え合う必要があることをねらいとして取り組んだ。子どもたちの実態は、争いがあつた後、謝ったり理由を述べたりすることなく、うやむやに済ませてしまうことが多い。この授業で本人にしか分からない感情を伝える大切さ、謝ることの大切さを学ばせた。

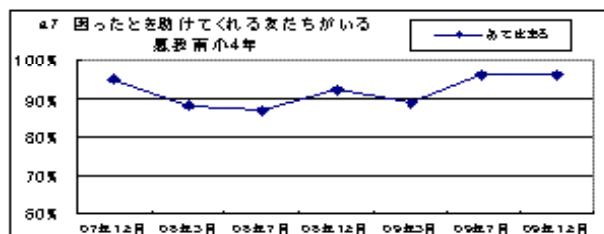
3学期は、自由に自分らしく表現することで、自分理解を深めさせる「すてき発見」のパッケージに取り組んでいきたい。

[2]子どもたちの変容

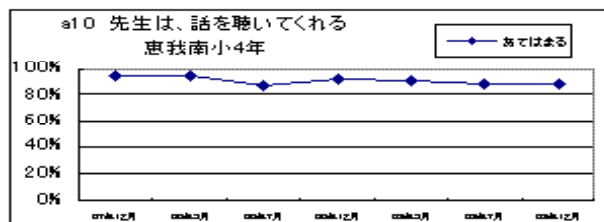


子どもたちの様子を学校生活調査から考えると、「a1 学校に来るのが楽しい」については、若干下がっているものの、高い数値を示している。

要因は友だちとの関係「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」からも考えられ、その他についても「a5 楽しく話せる友だちがいる」、「a9 休み時間は、友だちと楽しく過ごしている」の数値も高い。

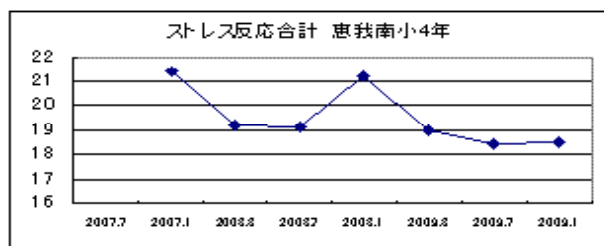


教員との関係も「a10 先生は話を聞いてくれる」からも見られるように良好である。

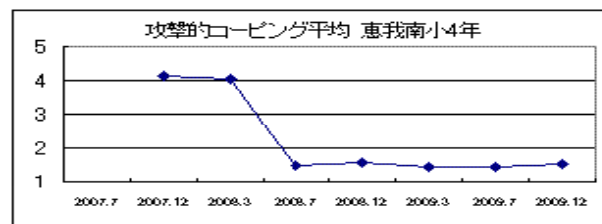


ただ授業に関しては、算数など学ぶべき事が増えたことから、勉強について悩みを持つ子どもが増えている。

ストレス反応合計については、グラフから見られるように減ってきている。ストレス対処についても攻撃的コーピング、抱え込みコーピング共に、この間低い値を示すようになっている。



「あいあいタイム」で、自分の気持ちを伝える、相手の気持ちを考える、友だちと協力して一つのことをやり遂げる授業を積み重ねてきたことが要因と考えられる。



e) 5年生

[1]今年度の取組

1学期は、「わたし発見、友だち発見」「ストレスを正しく知ろう」「林間成功大作戦」のパッケージにとりくんだ。「わたし発見、友だち発見」では、カードトークや班の友だちへのメッセージを送り合うことで、友だちの事を知り、感じた事を言葉や手紙で伝え、自信をもって学年・学級のスタートをきることができた。「ストレスを正しく知ろう」では、ストレス調査のシートなどを使いながら、ストレスは誰にでもあり、全てが悪いものではないことや、自分自身のストレスについて具体的に見つめなおした。また、ストレスの対処法を交流しあって、いろいろな対処法があることにも気付くことができた。「林間成功大作戦」では、全員が役割を持って林間学舎を成功させるために、実行委員会の結成から準備の時間の運営まで、子どもたち自身が中心となって取り組んだ。子どもたちが様々なアイデアを出し合い、互いに協力しながら行事をつくることができた。

2学期は、「みんなでつないで」「解決選隊問題どこナンジャー」のパッケージに取り組んだ。「みんなでつないで」では、運動会の学年リレーにむけて、取り組む前の一人ひとりの不安や頑張りたい気持ちを共有し、チームづくり、走る順序の相談、練習などを進めた。最終的には勝ち負けをこえて自分たちでリレーの競技をつくったという気持ちを持つことができた。「解決選隊問題どこナンジャー」では、班やグループで協力してどこナンジャーから出される課題に取り組んだ。相談しながら解決方法を考えたり、考えを話し合ったりしていろいろな意見があることに気づいたり、どこに問題があるのかを見つけたりすることができた。

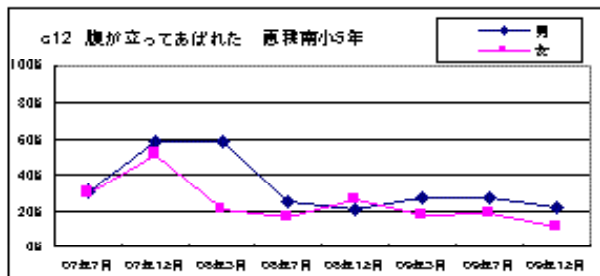
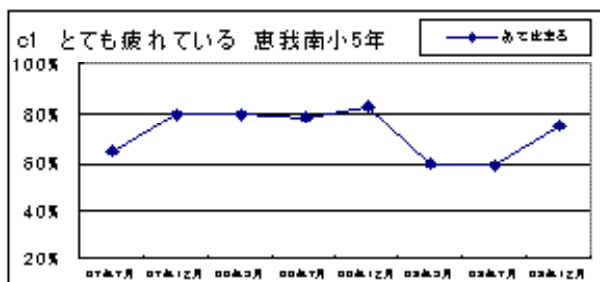
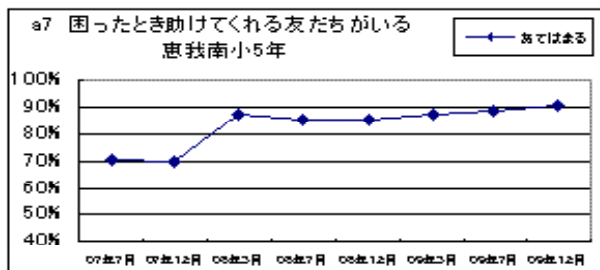
3学期は、「いろいろストレス対処法!」「いいところさがし」に取り組む予定である。

[2]子どもたちの変容

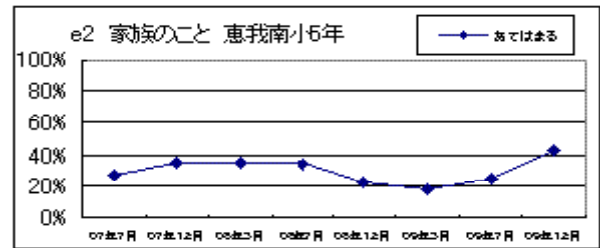
「a5 楽しく話せる友だちがいる」「a6 先生に何でも話せる」の項目が上昇し、また「a3 先生

にほめられたことがある」は大きく上昇した。この傾向はとくに男子に顕著にみられるが、これは今年度、各学級で終わりの会に「チャレンジ大賞」「あいあいハート大賞」を互いに発表し合い、良さががんばりを認め合う場が継続してとりくまれ、認められる場があるという安心感が育ってきたことと大きく関連していると考えられる。

また、「a7 困ったとき助けてくれる友だちがいる」や「a9 休み時間は友だちと楽しくすごしている」も増加しており友だちとの関係が良好であることが表れている。



一方で、「b9 人と比べて、自分はだめなところが多いと思う」など、思春期特有の人の目を気にする様子、「c1 とても疲れている」「c6 おなか痛い」など悩みやストレス反応は増加傾向にある。しかしそんな中でも「c12 腹が立ってあばれた」という項目は男女共に減少している。「d5 物にあたる」「d6 人がいやがることを言う」という攻撃的な対処法や「d8 我慢する」「d9 一人でじっと考える」という抱え込みの対処法についても減少しており、「d2 友だちと話す」「d4 先生に話す」が増加しており、「ストレスマネジメント」の取組や、友だち・教員とのつながりが、悩みを抱えた場面でもいかされていることがわかる。



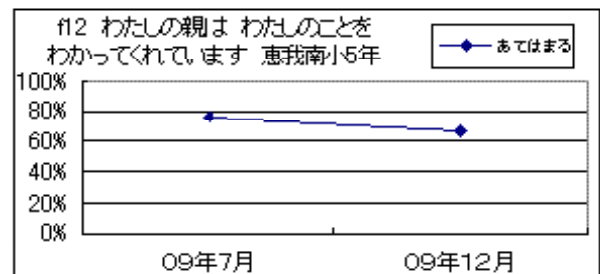
また、今回の調査で大きく増加したのが「e2 家族のこと」についての悩みである。「f8 私の親はわたしにたいへん期待しています」が増加している一方で「f12 わたしの親は、わたしのことをわかってきています」が減少しており、期待は感じつつも保護者との関係や家族について、何らかの課題を抱えている子どもが増えている。これをふまえて、いろいろな面からさらに取組を進めていく必要が感じられる。

f) 6年生

[1]今年度の取組

「あいあいタイム」での取組を通して、自分自身や仲間のことを知り、集団としての高まりを見ることができた。

1学期は「キラリ 輝け」と題したワークに取り組んだ。「やさしい」や「進んで働く」などの



項目から自分に当てはまる項目に をつけいく事で自分を客観的に評価し良さや弱さを確認することができた。また、同様のエクササイズを友だちどうしで行った。自分が思い描いている自分のイメージよりも、友だちからの評価が高いことで自己効力感が生まれるとともに、自分のよさを見てくれているという安心感につながっていった。そのことで自分に少し自信が持てるようになったと考える。さらに、評価のされていない項目を自分の課題として捉えることもできた。子どもたちは自分が友だちから認められているということを実感できるこの授業をととても好んでいて、授業中に「この授業はええわー。」「毎学期この授業してくれへんかなー。」という声を聞いたことが印象的であった。

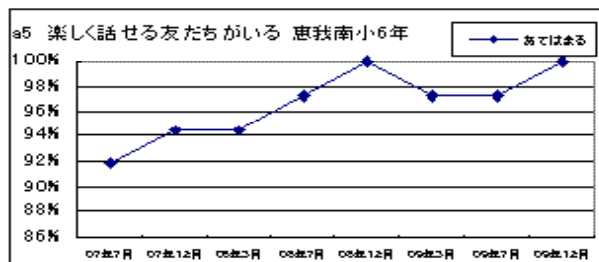
1年生との取組「いっしょに遊ぼう！」ではピア・サポートの観点から1対1のペアを組み、毎週の縦割り遊びや児童会行事、夏祭りで踊る河内音頭を教えるなど年間を通して活動を行う。活動を通じて自分たちが1年生をしっかりと支えていかなければならないという想いが芽生えている。

2学期は中学進学への不安を解消するため、中学生とともに授業を行うコラボレーション授業「そうそう！それぞれ！！」を行った。6年生は中学進学が迫ってくると、さまざまな心の揺れを見せる事がある。暴言や体調の変化、人間関係のもつれなど現れ方はそれぞれだが、卒業が近づくにつれてなんとなく落ち着かない様子を見せることが少なくない。6年間という長きに渡り、小学校で生活してきた子どもたちにとって、中学進学という今までとはまったく違う環境に進むことは、少なからずストレスとなっている。子どもたちが持つ中学校のイメージを聴いてみると「新しい教科や友だちに出会える。」など前向きに捉えている意見もある。しかし「先輩が怖そう。」「新しい友だちができるかが不安。」など人間関係におけるマイナスのイメージが多いように感じられる。体験授業や体育祭への参加、地域協会の活動など中学校で行う活動は存在するが、いずれも小学生にとっては受動的な体験であり、直接、自分たちが活動する機会は多いとはいえない。そのため「もしも、入学前に中学生とともに活動する機会があればそれらの不安は解消するのではないか。」という仮定の下にコラボレーション授業に取り組んでいった。

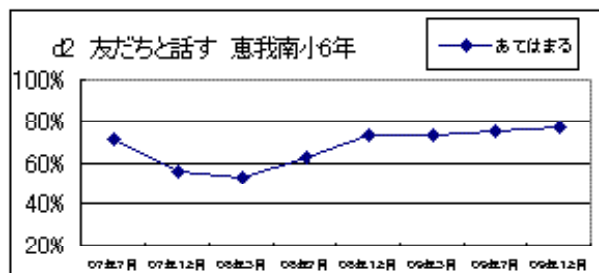
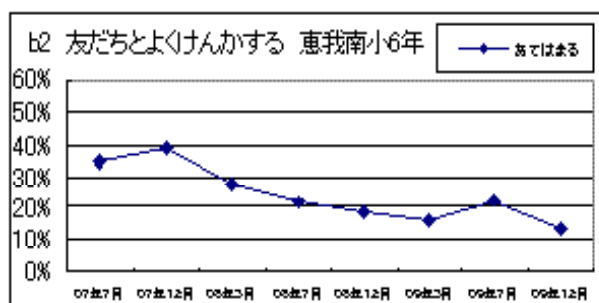
コラボレーション授業では小学生と中学生が同じグループ内で協力して一つのポスターを完成させていく。小学生が見てきた情報を元に中学生が作業を進めていく。小学生の情報がなければ中学生は活動することができない。そのためグループ内では必然的にコミュニケーションが発生する。そのことにより、「自分の話を聴いてもらえた。」「先輩と話ができた。」という思いを実感できる。また、一つの作業をともに成し遂げた達成感を共有することにより、「楽しそう。」「先輩ともうまくやっていけそう。」など中学進学を前向きに考えることができた。

3学期は自分の抱えているストレスとどのように付き合っていくのかを考えていく。また、中学進学に向けて恵我小学校との合同「あいあいタイム」などを行い、新しく出会う仲間とともに活動する機会をつくっていきたいと考えている。

[2]子どもたちの変容

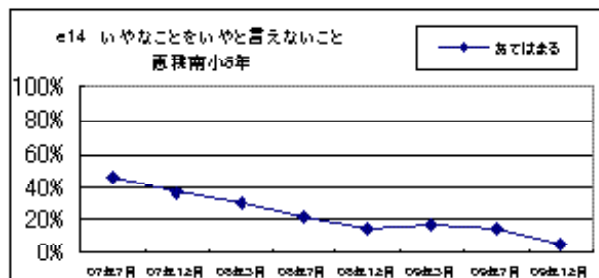


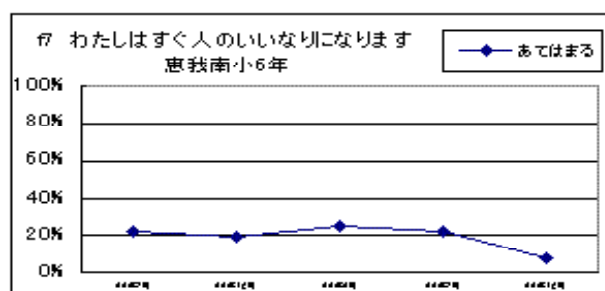
まず、本学年の子どもたちは「あいあいタイム」をととても肯定的に捉えている。学校での人間関係においては「a5 楽しく話せる友だち」の結果から多くの子どもたちが一定の友だち関係を築くことが出来ていることがわかる。



また「b2 友だちとよくけんかする」の減少と感情対処における「d2 友だちと話す」の推移からほとんどの子どもは自分の悩みを話したり、分かり合える関係を築いていることがうかがえる。

子どもたち自身の変化においては「e14 いやなことをいやと言えない」「f7 わたしはすぐ人のいいなりになります」の減少から自分の考えをしっかりと発言し、相手に伝えることができていると言える。友だちや教員との関係が安定してきたことによって、自分自身の発言や行動に自信を持ち始めているように考えられる。

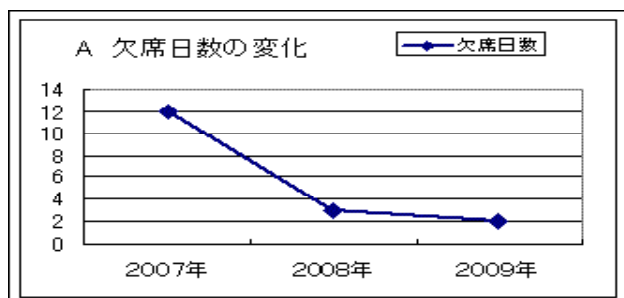




長期欠席の子どもの欠席日数の減少

子ども A

個別の子どもの実態としては、欠席日数が大きく減少している。子ども A は取り組み開始当初の平成 19 年度に大きく欠席数が増加した子どもである。明るく、元気な性格ではあるが、自分に自信が無く、複雑な家庭環境であり、敏感なあまり、気遣いを人一倍しているようであった。その結果、アンケートにおいても悩みやストレス反応合計において高い数値を示していた。昨年度から不登校生等支援会議や実態把握ワーキングにおける追跡調査が始まった。データや個別の実態から取組の方針化がはかれ、昨年度はストレスマネジメント、今年度は自己肯定感をテーマとした授業を展開した。



アンケート結果の推移を見てみると悩み、ストレス反応合計が増減をくり返しながら徐々に減少している。自分に少しずつ自信を持ち、そのことが学校生活満足度の増加と欠席日数の減少につながったのではないかと考える。



2. 教員のアンケートから

